

大賞

茨城県古河市

山中^{やまなか}

俐弦^{りつ}(小1)

によきによき

「じゃがいもあげる。」

おんなのこはあひるさんにじゃがいもをあげました。するとあひるさんはじゃがいもをみずうみのなかへもって行ってうめました。によきによきとたくさんじゃがいもがそこからでてきました。みんなよろこんでみんなだべました。

「おはなもうめてみよう。」

あひるさんはこんどはおはなをうめました。によきによきとおはながたくさんさきました。みずうみがきれいなぴんくいろになりました。「もののじゅーすみたいだね。」

とみんなよろこびました。それをのんだあひるさんははねがぴんくになりました。「ふらみんごになっちゃったあ。」





準大賞

茨城県古河市

渡邊

千優（小4）

おひな様のために

あるお屋敷の押入の中、たくさんの人形が飾られる日を待ち遠しく過ごしていたある日、何とこの押入に人形の大敵である虫が現れました。衣装などを食べてしまう虫です。

「何としてもおひな様を守るのだ！」

二人の侍が、満を持して出ていきました。

見事な刀裁きで次々と虫を追いやりました。

「私の十二単をまもってくださいさりありがとうございます

ございます。あなた方の端午の節句ももうすぐですね。」

おひな様がにこやかに笑いました。

この二人の侍のおかげでおひな様は無事

桃の節句を迎えることができました。

この話は、人形中で代々語り継がれてい

くことでしょう。

入選

愛媛県松山市

若狭^{わかさ}

早^{そう}(小2)

春をおとどけ

春一番がふいたら、どこもかしこもぽかぽかいい気持ち。ぼくは風の子、はるいち。妹といっしょに、日本の南から北まで春をおとどけしている。

「ふう。ちよつと休もうか。」

「そうだね。ちようど半分まで来たかな?」
ぼくたちはいずみのそばで、ちよつと休けい。花のおいにかこまれ、のんびりしていると、あひるさんがあいさつに来てくれた。

「はるいちさん、ながたびおつかれさまです。今年も元気な風をありがとうございます。」

「どういたしまして。よかったら、いっしょに休けいしませんか。」

妹におせんべいを出してもらって、みんなで分ける。風にとばされないよう、気をつけて。



入選

茨城県古河市

高松^{たかまつ}

歩花^{ほのか}（中2）

僕の色



どれだけ探しても何も無いし、誰もいない。それに、どこまでも続いているように見えて端がある。そんな不思議な世界に突然僕は生まれた。この世界はいつまで眠っているんだろう、なんて待ちくたびれていたとき、そこに君は現れた。雪のように白い肌に真つ暗な髪。「君は誰？ どこから来たの？」話しかけても、君は笑顔のまま動かない。その場を離れようとしたとき、急に世界が色付いて見えた。いや、本当に色付いた。先程まで君が着ていた白いワンピースはやさしい桃色に染まった。気づけば、色とりどりの無数の薔薇が咲き誇り、始めの真つ白な世界からは想像できない美しい光景が広がっていた。いつか僕のこの羽にも、色がつくだろうか。

入選

茨城県古河市

初見^{はつみ}

侑亮^{ゆうすけ}（中2）

またね



ぼくのころは、いつもまっくろ。おかあさんがせんえんさつをにまいつくえにおいていつてごかいおひさまにおはようといつてもかえつてこなかった。そんなことがいつもつづいていて、えがおのやりかたがね、わかんなくなっちゃったんだ。でも、まっくらなおそらにまたねつてするとたのしいおにわでゆきちゃんとあそんでるんだ。あひるさんもきてたのしくなつて、そうするとね、ころがあかるいいろになつてきてえがおのやりかたをおもいだしたんだ。でも、いかなくちやつてときがくるとみんなにまたねつてして、あかるいおひさまにおはようつていうんだ。またえがおのやりかたがわからなくなっちゃうまえにまっくらなおそらにいうんだ。またね。



入選

茨城県古河市 青木 あおき 蒼弥 そうや (中1)

背を預けて刃を抜く

夜風に揺れる青の衣で、ふたりの剣士は並び立つ。言葉を交わさず、その歩みが雪の道さえ静めてく。背に預け合う覚悟だけが、夜の気配を断ち切った。「この先に何があるうとも。」短く言葉を交わした。風が鳴り止む一瞬の中、剣が閃き、影が崩れる。音もなく消えた敵に、目もくれずに進み出した。語ることなく背負うものを、ただ、胸の奥に沈めた。月が照らす白い足跡。闇に溶けても確に残る。沈黙すら、信じる強さがふたりに宿っていた。何のためか、誰のためか。言葉はもういらなかった。剣の重さを知っていれば、それだけで足りていた。遠くに灯る朝の気配に歩みを止めず、顔も上げず。語らずとも通じる想いを、静かな背中に映していた。

入選

茨城県古河市 沼田^{ぬまた} 唯愛^{ゆい}（小3）

ガーのひみつのつばさ



ぼくは、ガーガー川にすむアヒルのリーダー
ガー。ガーガー川は、ふつうの川じゃない。
水はきらめき、風はささやき、夜になると月
の光が川の底までとどく。ここには、人に見
えないアヒルのまほうが流れている。ある日
いつもパンをくれる人間の子どもたちがやっ
てきた。二人は、ただの人間じゃない。心の
光を持っている子ども。ぼくは、決心した。
ひみつの池へ二人をつれて行くって。ぼくは、
羽を広げ、まほうの光を出した。ひみつを分
かち合える心を持った人にしか見えない光。
その光を進むと、花のトンネルをぬけ、ひみ
つの池へ向かう。小さな羽の赤ちゃんたちが
うかぶ水面には、空の色と星のきらめきがう
つる。水の中には、虹色の魚が泳いでいた。



入選

茨城県坂東市

北城 きたしろ

蒼真 そうま (中2)

ブーム

「えいつ!」「やあつ!」と怒号が響く。二尺ほどある刀を振り回し、悪人を成敗するのである。令和でいうところの警察のお役目に近い。盗人や罪人がうろつく夜に煌々と光る松明と共に、己の目も光らせる。ほら、また刀を抜いたようだ。勢い余って、松明も手からすっぽ抜けた。「おい! 松明、落ちたぞ。」「うわ! やっちゃった! しかも消えてるし……。」「LED壊れたんじゃない?」「やば! っていうか、口調戻ってるよ。」「しょうがないって、それ高かったんでしょ?」「はあ。」驚いただろう? 時は四千XX年、令和に昭和ブームがあったように、今は江戸ブームが日本を席卷中、まあ、令和の君じゃ想像もつかない先のことだろうけどね。



入選

茨城県古河市 小島^{こじま} 利緒^{りお}（小1）

そらのさかな

おんなのことおとこのこがかわであひるに
パンをあげていました。するとどこからか「ぼ
くもたべたいな」ときこえてきます。ふたり
はびっくりしてかおをみあわせました。「ど
こからこえがするんだろう」ふたりがうえを
みあげると、そこにさかなのかたちをしたく
もがうかんでいます。「ぼくにもちようだい」
とくものさかながいました。「みんなでいつ
しよにたべよう」とふたりはそのくもにちか
づいてパンをわけてあげました。

「ありがとう。おれいにぼくのせなかにのり
なよ」くものさかなはふたりをせなかにのせ
てそらたかくのぼっていきました。たくさん
のくものさかなたちとあひるとふたりは、み
んなでたのしくそらをとびました。



入選

茨城県古河市

佐藤 さとう

美知佳 みちか (小6)

憧れの人

僕には憧れの人がある。その人は常に冷静で、周囲に目を配ることができる。そして何より強く、火を自由に操る達人だ。

僕は、彼のようになりたくて、毎日鍛錬を欠かさなかった。彼もそんな僕に色々教えてくれた。そして、ついに僕も火を操ることに成功した。僕は、彼に喜びを報告しようとしたが見つからず、一度と会うことはなかった。やがて、私をしたう弟子ができた。素直に助言を聞いて成長する弟子は、かわいいが脅威でもあった。弟子が火を操れるようになった時、私は嬉しく思いつつも、その場から去りたくなった。でも、私は憧れの人とは違ふ。もっと強くなる決意をして、残ることにした。たとえそれが辛い道であろうとも。

入選

茨城県古河市 中村 なかむら 理世 りせ（小5）

アヒルのおくりもの

「ぼくの大好きな場所を見に行こう。」

あひるくんは声をかけられた妹とぼくは、わくわくしながらついて行った。着いたのは、森のおくの大きなほら穴。入り口が光っている。入ってみると、穴の中は、虹色の世界だった。七色に輝くたきも流れている。水の中に手を入れるとみるみるにじ色の手になって心がおだやかになっていく。このどうくつはやさしさのどうくつだ。この水でみんながやさしくなれたら、争いはなくなる。たくさんの人がきずついているのを見てあひるさんも悲しく思っていたのだと思う。ぼくは妹とにじ色の水をどんどん運んだ。地球から争いが消えていく。そして、みんなが平和になっていく。あひるさんが言ったとおりに。



入選

茨城県古河市

松崎 まつぎき

漣 みお (小2)

一まいのビスケット



アヒルになってしまった四しまい。一わの
アヒルは、ともだちにうそをついてきずつけ
た。一わのアヒルは、ともだちのわるぐちを
いってきずつけた。一わのアヒルは、ともだ
ちをからかってきずつけた。一わのアヒルは、
こまっているともだちをたすけずにそのまま
にした。アヒルたちが人げんにもどるには、
おんなのこからのビスケットをもらうしかな
い。でもビスケットは一まいだけ。おんなの
このとなりには、おなかをすかせたおとこの
こが一人。アヒルたちはかんがえた。アヒル
たちは、ビスケットをもらわなかった。人げ
んにもどれなかったアヒルたち。うれしそう
なおとこのこ。アヒルたちのやさしさをかみ
さまはみているだろうか。

入選

茨城県古河市 佐々木 咲奈（中1）

光が差す場所で



「ドクン…。ドクン…。」ママから伝わる心地良いこのリズム。私がもっと小さかった頃、このお部屋はとっても優しいゆりかごのようだった。でも、今の私にはこのお部屋がちよっぴり居心地が悪くなってきた。すると、遠くの方で一筋の光が差し込んできた。私は光の先にある泉のほとりで、ある女の子に出会った。

「ねえ、あひるさん。今日は一人でここに来たの。ママが入院しちゃったの。だって、もうすぐお姉ちゃんになるんだもん。私もあひるさんたちみたいなの4人家族になるのよ。」

その様子を見た未来の私は、心が踊った。

「もういいかい？」光の出口まで、あと少し。

「もういいよ。」やっと会えたね。

入選

茨城県古河市 あおき 青木 優結 ゆゆ（中2）

アヒルの日記 450日目



今日いつものように池に遊びに来たら、人間の男の子と女の子がいました。僕はその子達仲良くしたいと思い、落ちていたポテトチップスをあげました。人間の男の子と女の子は何か発していたけれど、人間語がわからない。僕達は「喜んでくれたのかな…」と思い、男の子の方へと近づきました。人間の男の子と女の子は「コバン」？と何回も連呼していました。僕の方を指さして「コバン！コバン！」と言っていたので僕の名前を考えてくれたのだと思います。今日で名前をつけられたのは372回目です。今回はコバンか…結構かっこいいと思いました。僕がコバンという名前で居続けられるのは何日なのでしょう。最高5日続いた名前は「ホワイトン」でした。

入選

茨城県古河市 渡邊^{わたなべ} 志穂^{しほ}（小1）

まほうのビスケット



「いつか人間になっておしやれしてみたいなあ」あひるのこどもたちはみずうみから人間のようすをながめゆめみていました。

あるひおひさまからふつてきたビスケットをたべると人間になることができました。

かわいいくつをはいたあし、りぼんのすてきなわんぴーすをきて、あいすくりーむのおいしさにかんどうしました。

しばらくすると、みずうみのせいかつがこいしくなり、おかあさんやおとうさんにあいたくなりなみだをながしました。

すると、たちまちあひるのすがたにもどりおとうさんおかあさんにあえました。

にんげんもすぐたのしかったけれどおとうさんとおかあさんもいっしょがいちばん！



入選

茨城県古河市 角矢^{かくや} 悠莉^{ゆうり}（小1）

おさむらいさんがふたり

おさむらいさんがふたり
りゅうぐうじょうにむかう
ぷりんせすにあいにりゅうぐうじょうにいく
はやくあいたい
てきがいた
ひとりのおさむらいさんがけんをぬこうと
したそのとき
「ちよつとまって」
もうひとりのおさむらいさんがとめた
「どうしたの？」
「ぷりんせすへのぷれぜんとわすれた」
「それはたいへんだ」
おさむらいさんはふたり
もとのみちをもどることにした



入選

茨城県古河市 早津 大和（小6）

叶えるにしても

我名は金剛力士。阿形と吽形である。寺院の入口で仏教、悪霊の侵入を防ぎ、仏教全体の守護が役目。民からお仁王様と呼ばれる。

今宵の我々は農民の三郎太たつての願い「隣村の敵が襲って来ませぬように」を叶える為、姿を変え、敵となる隣村の本陣へと乗り込みこうして参じてみた。が、ちよつと待て。よく見れば毎夜、闇に紛れ現れては「戦のなき世の中に早くなりますように」と祈る伝蔵が侍大将としてゐるではないか。三郎太の願いは容易いが、伝蔵の祈こそ全ての民の願いそのままではないか。さて、我々が今すべき事は、このまま去り本来の姿で黙って睨みを利かせて見守るべきか。それとも全ての衆生に済度を施すべきか。はてさて――



入選

茨城県古河市

上竹 うえたけ

晃太 こうた (小4)

悪霊退治

悪霊退治に出かけた兄弟は、聞こえてきた声の主に戸惑っていた。兄に止められ、弟はぬきかけた刀を握ったまま声の方を見た。

あやしい黒い影を見つけた二人が斬りかかろうとしたその時、「お助け下さい」と声を上げたのは悪霊ではなく山のように大きな熊だったのだ。熊は、山の食糧不足のため、こっそり人里に現れては、食べ物を探していた。人を怖がらせてはいけないと思い、見つからないようにしていたが、その大きな体に驚いた人々が悪霊と勘違いして騒いだのだった。

「私は人をおそいません。ただ少しだけ食べ物に分けてもらいたかったのです。」「そうだったのか。」兄弟は、人と熊の共存について考えながらいったん家路についた。